

平成29年度第1回御前崎市総合教育会議議事録

日 時 平成29年10月19日(木)
午前9時00分～10時30分
会 場 御前崎市役所 303会議室

次 第

1 開 会

2 市長あいさつ

3 教育長職務執行者あいさつ

4 協 議

(1) 御前崎市の不登校児童生徒の現状と課題について

(2) 学校施設の長寿命化計画について

(3) 社会教育施設のあり方について

5 閉 会

御前崎市総合教育会議委員

職 名	氏 名	備 考
市 長	柳 澤 重 夫	
副 市 長	鴨 川 朗	
教 育 長 職 務 執 行 者	吉 村 勝	
教 育 委 員	下 村 勝	
教 育 委 員	紅 林 幸 枝	
教 育 委 員	竹 田 和 世	

事 務 局

職 名	氏 名	備 考
総 務 部 長	増 田 正 行	
健康福祉部長	長 尾 智 生	
教 育 部 長	伊 村 衛	
総 務 課 長	鈴 木 雅 美	
教育総務課長	村 松 学	
学校教育課長	長 谷 川 延 明	
社会教育課長	鈴 木 弘 康	
教育総務課 課 長 補 佐	河 原 崎 聡 信	

1 開 会

○司会 それでは、皆様、おはようございます。

ただいまから平成29年度第1回目となります御前崎市総合教育会議を開催させていただきます。よろしく願いいたします。

まず、挨拶を交わしたいと思います。ご起立をお願いいたします。

(起 立)

○司会 よろしく願いします。

(相互に礼)

○司会 ご着席ください。

2 市長あいさつ

○司会 それでは、開会に当たりまして柳澤市長からご挨拶をお願いいたします。

○市長(柳澤重夫) 皆さん、おはようございます。このところ本当にはっきりしないといいますが、秋雨前線といいますが、お天気が続いております。また、南海上からは台風21号が本土をうかがっているということで、その台風につきましても大変心配するところではありますが、今日はそういった大変なお天気の中にもかかわらずお出かけいただきまして誠にありがとうございます。

また、日頃から皆さんには教育行政につきまして、特段のご理解とご尽力をいただいておりますことを心から感謝を申し上げます。この御前崎の教育も「スクラム御前崎」、そういうことで近隣の市町からはないような教育をさせていただいて、本当に感謝を申し上げる次第であります。いつも申し上げますように、そうした中で大変難しいわけではありますが、ぜひとも皆さんには今後、御前崎の教育、さらに充実するように、推進するようにお願いをしたいと思っております。

3 教育長職務執行者あいさつ

○司会 それでは、引き続き吉村教育長職務執行者からご挨拶をお願いいたします。

○教育長職務執行者(吉村 勝) 改めましておはようございます。大変お忙しい皆さんに早朝よりお集まりをいただきましてありがとうございます。本日は、本年度の第1回の総合教育会議ということでありますが、本来ならばもう少し早くこの会を開催すればよかったかなということですが、少し遅れてしまいました。今回の開催に当たっては、増田総務部長と連携をとりながら本日の開催を迎えたということは、大変意義のあることだと私自身は思っております。そして、そういう中で、市長さんをはじめ、副市長さん、それから健康福祉部の部長さん、それから総務課の課長さんにもおいでをいただいたということで、協議事項3点挙げてありますが、ぜひ大所高所から教育のことについてご意見をいただけたら大変ありがたいと、このように思います。限られた時間になると思いますが、よろしくお願いをいたします。

以上です。

○司会 ありがとうございました。

本日の会議ですけれども、10時半頃を目安に進めさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

4 協議

(1) 御前崎市の不登校児童生徒の現状と課題について

○司会 それでは、協議事項本日3点ございます。1点目は、御前崎市の不登校児童生徒の現状と課

題について、2点目が学校施設の長寿命化計画について、3点目が社会教育施設のあり方についての3点でございます。それぞれ担当の課長から現状等説明をさせていただきます。

本日の会議の協議の中で結論を得ようとするものではございませんので、情報を共有するという意味で、ご意見を交換をしていただけたらと思っております。

それではまず、御前崎市の不登校児童生徒の現状と課題につきまして、長谷川学校教育課長から説明をさせていただきます。

○学校教育課長（長谷川延明） おはようございます。それでは、学校教育課より御前崎市の不登校児童生徒の現状と課題についてを説明させていただきます。

毎年定例の教育委員会の中では、不登校の児童生徒の氏名を示したものを等を出しながら、不登校問題については、随時課題の克服に努めてきましたけれども、なかなか改善には至らない部分がありますので、ぜひ今回は市長さんや各部の部長さん等にお話を聞いていただければ嬉しいなと思って提案をさせていただきます。

まず、1ページめくっていただくと、御前崎市の小中学生不登校児童生徒の経年比較があります。御前崎市の不登校になった児童数、小学校の推移ですけれども、4名ないし一番多いときで15名です。これは年間30日以上を欠席した児童生徒数になります。28年を見ますと御前崎市の小学校は7名が不登校、小笠地区、菊川、掛川、御前崎市では47名で、割合的には14.9%です。児童生徒数の御前崎市の割合は約18%ですので、平成28年については、児童数から見ても大変御前崎市の不登校は少なかったと言えます。ところが、29年8月になりますと、現在のところ3名ですが、小笠全体では15名ということですので、割合は20ということ、3市の中では不登校の出現率、それは多いということになります。心配なのはやはり中学校になります。平成28年、不登校が課題だということで、教育委員会でも何回も話をしながら、各校の生徒指導主任主事研修会や校長会等でもデータを出しながら示してきました。その結果、今まで40人以上だったのが28年度につきましては40人ということになりました。小笠地区全体もそのときは多かったのですけれども、小笠地区の割合は22.1%、ところが先ほど言った生徒数の割合は28年は18.3%です。御前崎市内で努力して減らしても小笠3市の中では多いということになります。29年度の生徒数の小笠地区全体の割合は17.6%です。ですので、現在29年8月の27%という割合は、非常に高い数値になっております。これは、御前崎市の掲げる重要な課題であるということで、個を追跡していたりとかいろいろな工夫はしていますけれども、なかなか解消されないものであります。もう一つ、この後回収をさせていただきたい資料をA3版で準備させていただきました。これは、各小学校と中学校の児童生徒が不登校にカウントされた児童生徒を全て挙げてあります。小学校については、昨年不登校に名前が挙がった者と新たに本年度名前が挙がった者、30日以上とあと月7日以上を休んだ子供と30日以上年で欠席した子供たちの名前がそこにずらっと並ぶわけですが、今回はプライバシーということで、名前のほうを削除させていただきましたが、特に見ておわかりになるのは、小学校については、第一小学校が64名中43名と非常に多いことです。はっきりとした調査をしたわけではないので、断言はできませんが、家庭的に恵まれない子供たち、親が子供のしつけやいろんな生活のほうを十分見ていないという家庭が多いということと、第一小に言えることは、※印で丸をつけている者がありますが、ここは就学支援ということで、左から4つ目の欄に丸印をつけてありますけれども、就学指導に名前が挙がっている子供たちです。何かやはり障害を持っている可能性があるということで、学校が市の就学支援委員会に、この子は特別支援学級に行ったほうがいいのかというような判断をした子供たちが非常に第一小学校の中には多いということが明らかになってきました。その横には出身園を書いてありますけれども、園には園長さんには、この名前つきの名簿を渡ししながら、「園のときにこの子が不登校になりそうだったというのがわかる」というふうに聞くと、「何となくわかる」というような答えが返ってきます。ですので、何か園のときから生活に心配のある子供や、少し障害を持っているのではないかなというような子供たちには、何らかしら園のときから手厚くしていかないと、小学校や中学校になったときに不登校になりやすいのではないかなというようなところまで今明らかになったというか、感じているところでございます。

裏面をごらんください。裏面は中学校です。昨年と本年度の不登校ということで、名前が挙がった生徒は全体で73名おります。浜岡中学校については52名ということで、約1割の子供たちの名前が挙がっております。出身もやはり第一小学校出身の子供たちが不登校になるということは、小学校のときのことを考えると、継続してということではなないかなと思いますけれども、中学校へ行くと浜岡東や北小学校で出身の子供たちも何人か不登校になっていますので、そういう部分で、学校全体でこれは課題であるということで、浜岡中学校については、昨年から文部科学省のほうから不登校専門の指導をしていらっしゃる方や、子供たちの居場所を作るということで、鳴門教育大の久我教授を招いて、子供たちに居場所を与える学校づくり、自己肯定感を上げる学校とはということで、全職員で研修をしております。本年度については、御前崎市内の小中学校の生徒指導担当や校長が集まってこの方の話を聞いて、そういった学校づくりをどういうふうに進めるかということ協議をしているところであります。ただ、この数字をみただけで本当に現在学校が抱えているという問題等が見えていると思いますけれども、問題行動につきましては、本当にやんちゃで困るという子供たちは、そんなにはおりません。学校をまたいずれ見ていただきたいなというふうに思うのですけれども、浜岡中学校も10年前に比べたら別の学校になっていると、よく見に来た先生方や保護者、または卒業生、幼稚園の今の保育士をやっている若い人たちは、浜中出身の方がすごく多いですので、そういった授業参観をしても、「私たちのときとは別の学校になっています」ということを言っていますので、そういう部分はいいのですけれども、やはり現在はこの不登校ということが非常に課題になっているということで、何とかやはり教育委員会としても、学校のほうをバックアップしていきたいなというふうに考えているところであります。

現状の課題ということで雑駁に説明させていただきましたが、いろいろご質問等あると思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

○司会 ありがとうございます。

ただいま学校教育課から不登校等の問題につきまして現状と課題を報告させていただきました。教育委員の皆様には、教育委員会でこういったものをご報告させていただいているところでございます。市長さんと副市長さんにこの現状を報告させていただきまして、ご感想、ご意見等ございましたらお願ひしたいと思ひますが、いかがでしょうか。

○市長（柳澤重夫） このグラフを見ると、以前よりも何か減っているような感じもするけれども、この29年度に関してはちょっと心配ということね。

○学校教育課長（長谷川延明） はい。

○市長（柳澤重夫） この後半のほうが少ないわけだけれども、不登校というのはもう何が原因なのか、家庭なのか子供同士なのか、ちょっとわかりにくい部分が、その辺わからないでしょう。

○学校教育課長（長谷川延明） そうですね、いじめがもし原因であるとしたら、それは重大事案ということで、これはすぐに市長さんのほうに、こういう例がありましたということで報告をするのですけれども、いじめはきっかけであって、もともと持っているものがあるという、そういうようなことが、一概にいじめで完全に不登校というような子供は、今現在はいません。それよりも、やはり安易に休む、何かテストが近いからとか体育大会があるとか夏休み宿題ができていないから提出できないとか、そういったところに簡単に休んでしまう。特にこの9月が、いつも5月であるとか6月が心配だったのですが、この9月に急激に不登校が伸びてきましたので、何かそういったところに弱さ、たくましさ欠ける部分があるのかなとは感じています。

○市長（柳澤重夫） これ先生、年間30日以上不登校という定義性があるのね。

○学校教育課長（長谷川延明） はい。28年度までは年間30日以上の方です。8月の時点でももう30日を超えている者はカウントしています。

○市長（柳澤重夫） 昔から家庭関係も変わったもので、今は。家庭関係がそうすると影響があるのではないかな、これは。

○副市長（鴨川 朗） 特に池新田地区にひとり親世帯が多いという、浜岡保育園あたりでは3分の

1 がそうだという話も聞いているのですけれども、家庭環境の中でひとり親の方が不登校になるというような傾向、ここの中にひとり親が多いのですか。

○学校教育課長（長谷川延明） 申しわけありません。そこまでちょっと分析はしていないのですが、ただ母親が起こしてくれないとか、もうそのまま仕事に行ってしまうとか、第一小学校にはスクールソーシャルワーカーがかなり行っているのですけれども、空いている職員とソーシャルワーカーが朝迎えに行くということは、他校と比べ物にならないくらい多いのが現実です。

○副市長（鴨川 朗） 以前に第一小の校長先生がご自宅まで、不登校で行ったという話も校長先生から聞いたのですけれども、そんな状況ということですか。

○学校教育課長（長谷川延明） はい。かなりそれでも改善をされて、8時以降に登校してくる子供というのは、少なくはなっているのですけれども、人数が多いですので、無理かもしれませんが、ほかの学校が仮出席だという日数があるのですけれども、第一小については、仮出席というのは、もうほとんどあり得ない状況ですし、浜中も朝8時の登校で出席できていない子供が20人いるとか、そういうような子供のことは、もう日常的にあります。

○司会 教育委員の皆様からはいかがでしょうか。

○教育委員（下村 勝） 1つ確認したいなと思うことがありますけれども、休む原因が、問題行動とかいじめではないということであるというお話だったのですけれども、それは例えば学校に行って友達関係とのコミュニケーションのほうの問題があるのか、もっとさらに前提となっている無気力のような形になっているのか、そのあたりというのはどういう傾向があるかわかりますでしょうか。

○学校教育課長（長谷川延明） やっぱりコミュニケーションに欠ける子が不登校になるということは、いろんな子供たちの様子を聞くと、可能性としては、かなり高いなと思いますし、夏場でもマスクをつけて人と余りかかわらないようにしていたりする子供というのは、もう年々増加していることがありますので、以前のように問題行動ではじけてしまうという子供たちよりも、そういった子供たちがやはり心配かなと思っています。

○教育委員（下村 勝） そういった内容だった場合には、恐らく幼少期の小さいころのいわゆる教育といいますけれども、大事なことだなと思います。幼稚園とか保育園の方針というのをもう一度確認する、もちろん基本は大きく変える必要はないと思うのですけれども、一部そういう子供たち、そういう感性を持った子供たちへの対処というのは、少し違う方法も考えてもいいのかなというように気がします。

○市長（柳澤重夫） シカゴ大学、何という教授だかちょっと覚えなくても、40年間にわたって追跡調査したらしい。幼稚園園児だけ、園児の行動をずっと40年間、将来この園児はどうなるかということをして40年間追跡して、結果として、この園児は将来収穫が多いというか優秀というか、そういうのがある程度わかってきたというか、園児の教育によって。どんなことをやっているかという、子供たちが園児の中で集中して最後まで仕上げる、そういった集中力、こういったものをやっているらしいです。すごく複雑な積木があるらしい。それは、注文してもなかなかすぐ間に合わないやうぐらい人気あるらしいけれども、それを集中してやらせるとか、そういったものをやらせる。それがすごいその子供の生涯というか、それを一生懸命言っていました、人間性ももちろんそうだと思います。そういったものにつながるということでもありますので、中学になってから直そうかと思っても直らないのよね。もう本当に幼児教育の必要性、大切さということとその教授は話をしている、そんな状況だったものですから、私いつも言うように、「つ」のつく年齢が一番大事だと。1つ、2つ、3つ、9つまで、これでほとんど決まってしまうというようなことを言っていますので、その年代までに、個性というのはみんな違うと思う。その個性、いい個性の人はいいけれども、悪い個性もあると思うのです。その個性を良い方へ変えるのも家庭教育であり現場教育であり、そういったものでもあるのだから、そういったものを含めてやっていかないとだめだと思うのです。だから、学習指導要領の中で勉強を教えて、卒業させたらいいのではなくて、そうではないと思うのです。

さらに平田寺というお寺がある。この古い住職が、もう亡くなったと思うけれども、社会教育のと

きの後援会長、親の責任として学校を卒業させた、これは高校に限らず大学ももちろん。その子供が社会へ出て、学校を卒業させたからこれで親の責任を果たしたとか、教育が成功したとか、そうではないよということを言われた。その子供がどこを卒業したにしても、社会へ出てコミュニケーションであるとかいろんな社会性、こういったものを身につけて社会で立派に通用するようになって初めて教育は成功したということを言っている。お坊様が。確かにそのとおりだと思うのです。幾ら勉強できても社会に出てくじけたのではどうしようもない。そういった人を育てるにはどうしたことをするのがいいかということが大事だと思うのです。だから、教育のあり方そのものを考えなければいけない面もあるかもしれないし、とにかく教育というのは学の問題だけではなく人間をつくり上げなければならない。人間をつくる。どういう人間を将来つくるかということが教育の目的なものだから、人間づくりだと思う、教育というのは。学問とあわせて、だからそういうところへ視点を少しでも充てながら、子供は将来どういう子供に育てたいというものがある程度イメージしながらやっていかないと、なかなかそれには先生方もそういったものを頭の中に置きながら情熱を傾けるというか、そういう方面に、そういうのが大事ではないかと思うのです。

早稲田大学の応援歌作った御風が出てきたよね。御前崎の「御」と「風」を書いて「御風」というのが早稲田の応援歌作った人。この人が「タケノコのように伸び伸びと育たぬものか人間の子も」と言ったものだから、もうずっと昔からこの教育というのは、みんな悩んで悩んできているから。いつまでたってもこの悩みは消えないと思う、教育の悩みというのは。だから、私はもうこれからの社会にどういう人間を送り出していくかというのが、これからの教育の仕事ではないかと思う。どこの大学入れるかとかではなくて、どういう人間を社会へ送り出していくか、社会で通用する人、足腰の強い人、忍耐力のある人、創造性の豊かな人、こういった人をつくり上げるにはどうすればいいかということは本当に大事だと思う。だから、私は学校だけではなくて、家庭教育もそう、地域の教育もそう、全体でそういったものやっていかないと、家庭教育だけではできないと思う。だから、家庭教育で親たちが今そういう教育受けているのだから、ぜひこれだから今社会がそういった子供たちの教育にかかわって、将来その子供たちが大人になったときに、またすばらしい子供たちが育つような環境をつくっていかないと、と思う。どこかでそういったことをやっていかないと。そんなふうに思うのだけれども、なかなか難しいもので、理想かもしれないが。

○司会 ありがとうございます。教育委員会のスクラム「御前崎」の中でも乳幼児教育が大事だということで、根本的なものでこれからの社会を生き抜くための心の根っこの育成といったことを掲げて乳幼児教育に取り組んでいるところではございます。

○司会 竹田委員さん。

○教育委員（竹田和世）3月から教育委員させていただいて、今まで何となく参加していた行事なんかも、少しだけ教育委員の立場として見させてもらえるようになったかなというところがあるのですが、この間の教育委員会のときに、中学校の体育祭のときに開会式で倒れた生徒がいるのに、寄っていったあがる周りの生徒が誰もいなかったということをお話しさせてもらったのですが、実はこの間のスクラムグッドマナーの日、10日の日にも小学校に挨拶運動行きました。校長先生と2人で立っていたのですが、そこで小学校の1年生の子が転んで足すりむいたのに、集団登校で来ているのに寄っていったあがる子供たちがいないのです。まさにその中学校の体育祭で見たのと同じ光景だったので、これって何なのだろうって。縦割りの活動をしたりとか、あとそういう集団登校をしたりとかとあって、上級生、下級生が一緒にという活動もしているはずなのに、何でこういう気持ちが希薄になっているというか、本当にすごく残念な思いがしました。

それから、この間の幼稚園の運動会も、市長さんもお見えになっていましたけれども、年少さんのリズム運動のときにはいらっしやいましたかね、いらっしやいませんでしたかね、お遊戯したときに、3分の1ぐらいの子が座ってしまったり、輪の外を走り回ってしまったり、何かやっていない子がすごく目についたのです。それを私だけではなくて町内会長さんたちも、何か本当に「俺らのときは、こんなことしたら先生に叱られたけどな」とかって、そういう言葉で言われていたくらい目立ってい

たのです。あの子たちが年中、年長、小学校になったときに大丈夫なのかなと本当に実際思ってしまったし、それから私、年中に孫がいるものですから、おとといの祖父母参観のときも、年中2つのクラスがあったのですが、1つのクラスはびしっとやれたのに、こちらのクラスは男の先生だったのですけれども、何か統一されていなくて、だらだら遊んでいる、座り込んでしまう子がいて、父兄の声聞いて、おばあちゃん、おじいちゃんの声の聞いていると、「男の先生だもんで、何かびしっとせんだかね」とかという、そういう声が聞こえたりして、何か周りではぼつぼつと思っている人たちっていっぱいいるのだなというのを何となく感じてきました。だから、うまく言えないですけれども、やっぱり私は事あるごとにこういうところへ出ても、そういう実際というのをお話ししていかなくてはいけないのではないかなと、未熟ですけれども、そんなことを思いました。

それから、幼稚園のまとまりのなさという中に、今アスペルガーが十五、六人に1人であるとか、ADHDとかLDとか、そういう子供たちが多いという中で、やっぱり芽を見つけたときへの親御さんへの対応の仕方というのもちょっと、個々ではあるところの部分はあるのですけれども、でもやっぱり何かしらの形で早い時期に伝えていかなくてはいけないというのも、何かちょっと感じました。

○司会　ありがとうございました。

紅林委員さん、何か。

○教育委員（紅林幸枝）　不登校のことを、ずっと御前崎市の課題であるのですけれども、何年か教育委員をさせていただいて、だんだん見えてくるのが、先生方が本当にいろいろやってくださっているのです。本当に子供たち一人一人に対して、一人一人に違った対応をしてくださって学校に来れるように、本当に先生方がいろいろやってくださっているのです。でも、なかなかそれでも来れないというのが、何かそこに子供に来れない事情というか、そういうのがあると思うのですけれども、そこでさっきおっしゃったように、幼児期の教育のことが加わったりとかすると、もちろん幼児期の子供たちに対する教育も大事なわけけれども、その幼児期の子供たちを育てる父兄に対するアプローチがもう少し、私も自分が小さい子供を育てているときは一生懸命で、よくわからないというか、そういう誰か教えてくれる人というか、何かそういうものがあつたらそこに相談に行ったりとか、飛びついていったりとかしたかなって。お母さん同士が、うまく言えないのですけれども、どこかしら競争意識みたいな、何かどこかでランチとかしていると、若い、例えば幼稚園ぐらいのとか小学校の低学年ぐらいの子供さんを持っているお母さんたちだと思う人たちが横で御飯を食べていると、「うちの子はどことこの塾に行っているのよ、あなたのおうちはどこ」と言って、「うちの子はどどこに行っているのよ」と言って、知っている人はどどここの高校に入ったのよとか、何か見えない競争みたいな、でも何かそうではなくて、そういうところが見えない子供に変なプレッシャーというか、そういう何かもっと子供の根本的な育て方という、いい学校に行くばかりがいいわけではないのだよって、さっきおっしゃっていたように、だから本当に社会性を育てるような教育ができるように。そういうのを考えてしまって、例えば思ったりするのが、これが本当に3校だけだと思うのですけれども、私これを見たときに、いつも思うのが、高保さん出た子の不登校は余りこれで見えないのです。高保さんは、ちらっと聞くと、割と先生方が親御さんに対してすごいいろいろと言ってくださるので、それではだめだよというようなことをすごく言ってくださるので、なかなかそれはできないと思うのです。ほかの園とかだと先生方がそういうことをお母さん方に言うというのは、なかなかできないけれども、割と高保さんベテランの先生方が多い、あなたこれではだめってすごく叱られるから、叱られるからというのを親御さんが言ったりとかするのです。そういうのはやっぱりそれはすぐ子供に反映します。だから、割と子供さんがたくましかったりとかする、だからそういうことというのが、何か。

○市長（柳澤重夫）　おっしゃるとおりで、結構前かな、いつかテレビで、中学校か高校か、テレビで生徒が先生を足蹴りして、こんなことテレビでやっていた。先生は我慢していて、考えられないよね、本当に。あんなことを平気でやっているということは、もう先生は何でもっと怒らないか、私はあの中で今の教育の中でも、父兄は学校に子供を預ける、学校の間は。それは預けたでいいではなくて、先生方は先生方で預かった以上は、学校教育に御前崎市には御前崎市の学校教育の指針があるか

ら、ちゃんと。そういったものに沿って、市はこうしてやりますということを父兄にもちゃんと伝えなければいけないと思っている。例えば、今言った社会性だとか人間性とか、そういったものを、これは御前崎の人間像というか、では例えば今の社会が求めている人材、学校を入れて。協調性であるとか創造性であるとか協調性。コミュニティー能力。こういったものを今社会が求めているから。それに沿うような人を育てないといけないわけだね。学問ももちろん大事だけれども、それとあわせてやれないか。それについて、では御前崎の人間像はこういう子供を育てたいな、卒業させるときには。そのためには、学校教育としてこういうことをやりたい。だから、保護者の皆さん、私らこうしてやりたい、頼むよと、先生が学校現場から父兄に言う。示す、人間像を、こういう人間像、こういう子供に育てたいのだということを言って、そういう中で保護者にも理解してもらわないと。ただ、先生が保護者に気を遣っているような教育では、これはできないです。本当にあんなもので先生がいじけるような先生ではもう教育なんかできないもの。やっぱり先生というのは、生徒から信頼されて尊敬されて、そういう信頼関係の中で成り立っているから、教育というのは。先生と生徒の。そういったものが外れてしまっているよね。逆に言えば、言葉悪いけれども、先生が生徒を怒るとそれをまた保護者から言われるので、先生が生徒に気を遣うようなことでは、もう教育は成り立たないということ。だから、そういった厳しい目で教育というのは臨んでももらわないと人というのは変わらないと思う。さっきも言ったように、やっぱり人を動かすのは心しかないと思う。その情熱しかないと思う。絶対伝わると思う、そういう情熱というのは、人には。しゃらくさいこと言うけれども、私は教育を受けている場でそう言うので。

○学校教育課長（長谷川延明） 1つだけ済みません。ここまで細かいデータは示していないのですが、年6回各学校のPTA会長さんが集まる会合が夜7時から年6回奇数月にやっているのですけれども、今度11月16日にはPTA会長さんだけを集めて、そのPTA会長さんの代表者が、早寝早起きをしているうちの子供は学力が高いというのは、今回の4月のデータで出ています。ところが、早寝早起きをしている子供たちが、全国平均よりも御前崎市は低いのです。朝御飯を食べている子供たちは学力が高いという中で、御前崎市はやはり少し全国よりも低いということが出ていますので、この2つをきちっとPTA会長さんに伝えて、今のPTA会長さんと来年のPTA会長さんが一緒になって4月のPTA総会で、これは御前崎市にとっては重要な課題なので、保護者の皆さん、一緒になってやりましょうという声を上げてもらう機会を作ろうと思っています。また、報道であるとかケーブルテレビとかにも来ていただきながら、その会の様子を見て取材していただいて、ぜひいろんなところにそういったものを流していきたいなと思っておりますので、またもしご都合つけば、今回はこの3階で、日程をちょっと変更して、この3階で11月16日19時から行いますので、またよろしく願いしたいなと思います。

○司会 吉村先生、最後に何かございましたらお願いします。

○教育委員（吉村 勝） 幼児期の教育というのがやっぱり一番大事ななと。先ほど説明の中に、幼稚園、保育園の先生が、この子ちょっと将来登校拒否になりそうだなと、ちょっと肌で感じ取ったというような話がありましたよね。やっぱり1つは、家庭の中の育ちの中の雰囲気というか、家庭の中にそういう学習的な話題があったり、それからしつけ的な話題があったり、そういう中で育ってきた子というのは、やっぱり大人になってもそういうことは、やっぱり心得ているのだけれども、そういう雰囲気がない家庭で育った子というのは、やっぱり若干問題があると。家庭のせいにするわけではないのだけれども、スタートの時点ではやっぱりそういうところが見受けられると思うのです。今御前崎でやっている根っこの部分、根っこのほうを育てるということをやっているのです。その一つが遊び込む子、その遊びの中からその子供たちの主体性というか工夫をするだとかという、そういう芽を伸ばそうと今しているわけだね。だから、そういうことを心がけていけば、必ずそれは小学校へ行っても中学校へ行っても高校へ行っても、あるいは大学へ行っても社会人になっても、それを自ら動こうという意識というのは、必ず内面に持っていると思う。そういうことを信じてやっていくわけです。だから、不登校の子というのは、やっぱり起因はいろいろあると思うのです。例えば、小学校

の段階では、やっぱり家庭の影響は非常に大きいと思うのです。だけれども、中学とか高校へ行くと、それに学力とかあるいは人間関係とかという、そういうものが複雑に絡み合ってきて、だから今の状況を見ていると、一時の非行的な不登校というのはほとんどいないのです。要するに、遊び回って学校へ来ないという、そういう子はいない。大体がひきこもりになっている、そういう傾向です。だから、その辺も考えながらやっていく。そうするとひきこもりになっているとやっぱり家庭とのつながりというか、さっき市長さんが言った、親と学校側の信頼関係をどうやって作っていくかということ、1つ大きいことになるのかなと思ってきているのです。今、ちょっと新聞で話題になっているでしょう、福井の池田中学校かな、自殺した子のあれで、学校側は叱責したという、宿題をやらなければだめだと強く指導したと学校側は言っているのです。ところが、親はそれを教師による陰湿ないじめということを言われているわけ。だから、そこで信頼関係は全くないわけ。だから、不登校もそういうことで、やっぱりあの先生がそうやって指導して頑張ってくれるからうちも子供を学校へ出すように努力しなければいけないという、そういう雰囲気を作っていくということは一つ大事だと思うし、それからさっき竹田委員が言ったのは、子供同士のかかわりという、子供が窮地に遭ったとき、飛んで逃げるのではなくて手を差し伸べる、そういう人間関係を学校とか園の中で作っていく、そういうこともやっぱり必要なと思っています。そんなこともちょっと感じています。ただ、私なんか今やっている幼児期の教育は、それは間違いないな、本当にスタートの競技と思ってしています。

以上、感じたことです。

○総務部長（増田正行） 教育の専門家ではないのものですから少しわからないのですが、ただ自分が今総務部という中で職員を見ているのですが、その職員の中に、どうしてもやっぱり新採後3年ぐらいの中で、不登校ではないのですが、やはり病気になって休む、そういう職員も何人かおります。実際のところ、そういう職員は適応障害とか鬱とか、そういう病名なのですが、やはり先ほど長谷川課長が言われたように、あることに対してやっぱり乗り越えられなくて、そういうところから仕事から逃避をしたりとか、今吉村先生言われたように、上司の叱るですね、怒るではなくて叱るという行為に対してやはり受けるほうで、それをやはりパワハラだとかそういうようなことで休むような、そういうような職員が見られます。ですので、やはりこの不登校というものがやはり社会に先ほど市長が言われたように、縮図になる部分もありますので、いかにその幼児期、いわゆるこういった教育の中で道徳というか、本当に素直なやはり子供に育てあげてほしいというのは、すごく今仕事をやっています中で感じております。

あとは、やはり子供のときに、今社会に出てなかなか成功体験、サクセスストーリーというのがやはり描けないのです。ですので、ぜひそういうものを幼児期の中で、成功体験というのも子供の中にちゃんと根づかせていただきたいなというふうに思います。ですので、社会に出たときに、やはり子供のときのことは、不登校ということではなくて、社会に出たときにどういうふうにかいてくるかというのがすごく今感じています。現状は、御前崎の子ばかりではないのですが、今は県外からも職員採用していますが、そういう中でもそういう職員がやっぱりいますので、ぜひそういう意味でも、幼児期のいろいろやはり道徳、モラル、それからやっぱり素直な心、そういったものを育てて社会に送り出していただきたいなというふうには思っています。

以上です。

○健康福祉部長（長尾智生） 先ほどの話の中で、不登校の子、家庭教育に問題が、家庭環境の問題がある方も多いという話と、それと就学委員会に名前が挙げられた子が出てきた場合、さっき竹田委員さんから、幼稚園の段階で気がついた子がときに、早目に対処するという、そういった中では今母子の中でも3歳児健診、健診の時点である程度療育、そういった芽のある子については誘っていると。就学前の5歳のときに、そういった恐れのある子は、まだ1年ありますので、教室に誘って、そういう就学のときに、その道筋を保護者の方に説明しているということなのですけれども、ここに上がってきているという子供の中には、保護者の方がやっぱり納得しないといいますが、受け入れられないという方が結構いられると思うのです。それと同じで、地域でお母さん同士で育てているとか、お父

さん父兄で育てるというようなことについても、確かに自分たちが子供が小さいときに学校に行っているところに、町内会単位で健全育成みたいな、そういった問題を話し合うというのがありまして、PTAが集まって。そういう問題を話し合ったときに、大体問題のある家庭の親御さんは来ないのです。だから、子供の顔が見えて、問題が多少あるかないかは別としても、そういった人たちが集まって話し合う場にいる人たちは、やっぱり子供についても話できるし、全く親御さんがそこに出てこない、その子供の顔もわからないし、そういったような部分でコミュニティーの希薄とか、そういったことがあるかと思うのですけれども、ですので、何とかしようというような人たちをしても、そこに土台に土俵に乗せるということがどれだけ必要ではないかと思うのですけれども、そこら辺のところが一番、もう何十年とそこの難しいところだなというふうに感じています。ずっと課題だなということです。

○司会 ありがとうございます。

不登校の現状ということで報告をさせていただきまして、その中で支援の必要な子が中にはいるよということで、御前崎市の場合には本当に個別の支援員ということで予算をつけていただいております。そういった意味では大変感謝をしているところでございます。また、予算の要求時期にもなりますので、来年以降に向けましてそういった予算の確保に向けまして、ぜひご理解をいただきたいなと思っております。

○市長（柳澤重夫） 御前崎の教育はもう連携だから、スクラム教育の中で。生涯学習とかいろんなものが入っているわけだから、これに沿ってやればいいということだね。私はその中で、御前崎市独自の今言った社会性とか人間性とか、そういった者を育てるために、教室単位でもいいし、先生独自のそういったカリキュラムとか、私のクラスはこういう子供を育てたい、そういう先生の一人の考え方でやってもいいと思うのだね。全部一緒ではなくても。そういった指導教育の中へカリキュラムを入れても悪くないと思うのだけれども。

○司会 ありがとうございます。

（２）学校施設の長寿命化計画について

○司会 それでは、時間もあれですけれども、続きまして、学校施設の長寿命化計画につきまして、村松教育総務課長から説明をさせていただきます。

○教育総務課長（村松 学） それでは、学校施設の長寿命化計画についてご説明を申し上げます。

時間もありませんので、ちょっと簡単に説明をさせていただくということと、今こういう課題があるということ、ぜひ情報共有ということでお願いをしたいと思います。

それでは、２ページをごらんください。国のインフラ長寿命化基本計画に基づきまして、御前崎市でも平成27年４月に御前崎市公共施設等総合管理計画方針編というものがこういう形でできております。また、28年の２月には御前崎市公共施設白書というものが作成されております。また、文部科学省のインフラ長寿命化計画行動計画におきまして、学校施設の個別施設計画として学校施設の長寿命化計画を平成32年度末までに策定するような指導がされているところでございます。この長寿命化計画の目的でございますけれども、中長期的な維持管理等に係るトータルコストの縮減及び予算の平準化を図りつつ、学校施設に求められる機能、性能を確保するというのが目的でございます。

さて、その市内の小中学校の状況でございますが、３ページ以降に一覧表になっておりますけれども、小学校では浜岡東小学校の校舎が昭和50年の建設で最も古く、42年を経過しており、体育館も40年がもう経過しております。

次に、浜岡北小学校も53年、54年の建設で、こちら38年、39年の経過となっております。第一小学校も同じような状況でございます。これらは、昭和50年代の初めに小学校の統合が行われたため、今後ほぼ同じ時期に多額の費用をかけて建て替えなどの必要が生じてまいります。その負担を避けようというのがこの長寿命化改修でございまして、５ページにありますように、早期段階から予防的な

修繕、予防保全を行い、コンクリートや鉄筋の強度が確保されるならば、70年から80年持たせようというのがこの長寿命化でございます。

済みません、具体的には、6ページにイメージ図がございますけれども、おおよそ20年目に大規模改造を行って40年目ごろに長寿命化改修、60年ごろに再度大規模改造を行って80年ほど使うというものでございます。こういう考え方は言い訳でございますけれども、実際問題としまして、5ページの（2）番のところに改築を行うケースということで、長寿命化が適さない場合というのがあります。例えば鉄筋コンクリートの劣化状況等によっては、長寿命化が適さない場合があるわけでございます。このように、この長寿命化計画でございますけれども、来年度予算を計上させていただきまして、できたら示させていただきたいと考えております。また、総合計画のほうの実施計画のほうにも載せていただければと考えております。そういったことで、こういうことがあることをご認識をいただきまして、この場でご討議ご検討をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

○司会 それでは、ただいまの学校施設の長寿命化計画につきまして説明をさせていただきました。

当然、小学校につきましては、同じころの時期に建てられているということで、仮にある程度の期間が過ぎて改築をしろという、それもまた集中をするというような、そういったことを避けるために計画をさせていただきたいというものでございます。

また、それ以降のページに、当然その改築、あるいは等をする場合に当たって、子供の生徒数の推移というようなことで、8ページ以降に今までの各学校ごとの推移が示されております。また、学校等の統廃合につきましては、教育委員会といたしますと複式クラス、あるいは複数の学年が1クラスになるような状況、そういったものが見込まれる場合には、合併のことも検討していくというような考えでおりますけれども、今のところはまだそういった状況にはないというふうに考えております。

ただいまのこの計画につきまして、何かご質問ご意見等がございましたらよろしくお願いいたします。

○市長（柳澤重夫） 調査しているのでしょうか。

○司会 調査を来年度からやらせていただきたいということでございます。

○市長（柳澤重夫） それだけ調整して。

○司会 課長、具体的な調査の内容というのは、どんなことを言うのですか。

○教育総務課長（村松 学） 具体的には、やはりコンクリートの強度とかそういった耐震性能がまずあるということが基本ですけれども、そういった上で今の老朽化の状況というものを把握した上で計画的に改修をしていくという、そういう計画を立てさせていただくというものでございまして、ただ、金額的にやはりなかなかかかるものですから、県のほうで高校のこういうような計画を立てるということで、県のほうも動いているわけですが、やはり1校当たり高校ですと500万円ほどこういった計画を立てる費用がかかるということで、御前崎市に当たっても各小学校1校1校ではなくて、小学校全体の計画というものを立てていくものですから、そうしますとやはりかなりの金額がかかってまいりますので、そういったこともいかに経費を抑えてやっていくかということも考えながら進めていく必要があるのかなというふうに考えております。

○司会 それでは、これにつきましては、また計画をさせていただいて、その後のまた協議ということでもよろしいでしょうか、お願いしたいなと思います。

（3）社会教育施設のあり方について

○司会 それでは、続きまして、3つ目の社会教育施設のあり方についてということで、社会教育課長から説明をさせていただきます。

○社会教育課長（鈴木弘康） 社会教育課です。よろしくお願いいたします。社会教育施設のあり方ということですが、社会教育課ではスポーツ施設、文化施設、公民館施設等多くの施設を担当して抱えております。今回、主に公民館及び市民会館、文化会館について調査させていただいております。公民館

につきましては、昨年あり方検討会を立ち上げて、今後のあり方というものを検討させていただいております。そうした中で、公民館は教育や学習の場として、社会教育事業や生涯学習事業のほかに地区の防災、福祉、コミュニティー活動などの場となっております。現在、防災、福祉、コミュニティー活動など、地区における役割の状態が求められまして、公民館ではその対応に苦慮していることから、昨年はこのあり方検討会を開催しまして、報告書をまとめさせていただきました。まとめた報告書の中では、コミュニティーセンター化への移行等がうたわれておりましたが、移行するに当たっては、当然いろいろな問題がありますので、運営組織や方法について調査研究を行いながら、移行作業について市長部局と教育委員会が協力して行わなければ、これは解決できない問題であるということがこの中で提言されております。実際、今、市長部局のほうとお話をする中で、今月につきまして幹部職員の方と調整をさせていただく予定となっております。

こちらの真ん中に絵で示させていただきましたが、社会的変化ということで、少子高齢化、地域の防災課の役割というものが増大しております。防災につきましては、大規模な災害等、地震等があったということで、特に地区の方面隊等の活動、そういったものが公民館のほうにお願いしているところではありますが、本来の生涯学習についての社会教育の面とは本来違うのですが、公民館組織を利用しながら防災について、また福祉についても、それぞれ市のほうからお願いしているものが増大しております。今後さらなる少子高齢化や小規模の多機能基地ということで、地域のことは地域で解決していくというような流れの中で、ますます公民館という組織が、公民館が重要な位置づけになってくると思われます。ただ、公民館本来のあり方等は、現在旧浜岡では特に地区の中心となって、公民館というものが地区の中でいろいろな役割を果たしておりますが、本来の形とは若干違っております。旧御前崎地区につきましては、それぞれの町内会が主にやっております、こちらの浜岡の公民館といったものは、それぞれの町内会組織が中心となっておりますので、現在の成り立ち等を少しつなぐということで、旧御前崎地区の2つの公民館についても、こちらの浜岡地区に合わせるということで合併以降取り組んでいただきましたが、なかなか同じようにやっていくというのが大変難しいということで、両館の館長さんから、何とかならないかというようなお話も伺っております。今後ますます地区防災や福祉の案件がふえていきますと、本来の生涯学習については、なかなか難しくなってきますので、本来の機能が逆に負担が多いことによって縮小されるのではないかと懸念されております。

そうした中で、こちらを社会教育課、担当課で考える案なのですが、昨年度の公民館あり方検討会を踏まえまして、地区づくりのあり方の検討というのを調査し、全体として取り組んでいかなければいけないのではないかということで、公民館という場で担う機能は、従来の社会教育だけではなく、公民館という場を地区の拠点とした地域づくりの機能、防災、地域福祉、教育等が集約された複合的な施設の場として考えていかなければいけないと思っております。一番下にありますように、ステップ1、ステップ2、ステップ3とあるのですが、今公民館と福祉、防災面、こういったものが同じ組織の方が同じような館長さん、事務員の方がやっておりますので、本来の形にするならば、主にこの3つのものを仕分けしまして、それぞれ別組織を立ち上げてやっていただければどうかということで考えております。そして、最終的にはそれが地区センターになるのかコミュニティー施設等へなるのか、どこまで行くのかはちょっとわかりませんが、とりあえずは現在の仕事について仕分けをしたいということで、担当課では考えております。こちらにつきましては、市長部局と協力をしながら現在進めたいと思いますので、今後もご協力をよろしくお願ひしたいと思ひます。

続きまして、文化施設についてですが、12ページです。合併によりまして、旧浜岡、旧御前崎、2つの会館が現在存在しております。それぞれの規模も違いますし、建てられた年度も違うのですが、竣工が市民会館につきましては52年ということで、既に40年経過しております。御前崎市の文化会館につきましては昭和60年ということで32年が経過しております。それぞれの機能も違いますが、こちらの市民会館につきましては、主にホール機能を有しております。文化会館につきましては、ホール機能にプラス研修室、こちらの利用もかなり多いということで、それぞれ少し違った機能を持ってお

ります。そうした中、客席のほうも、市民会館につきましては697席、文化会館は500席のホールの収用人員となっております。

合併以降、平成16年以降の主要工事の一覧を一番下に示させていただきましたが、市民会館につきましては、主に平成22年度に大規模改修ということで、耐震補強工事等を主に含めまして、約7億余の費用をかけまして整備をしております。一方、文化会館につきましては、当初はなるべく費用をかけないでやっていくというような方向でありましたが、平成23年度ごろから維持管理していくに当たって、どうしても必要な修繕等を進める中で、28年におきましては、エレベーターとか特定天井落下防止ということで、これはホールの中の天井がつり天井になっております。こちらが落下したとき、客席に入っているお客さんに対して直接落ちないようにネットを張るという行為ですが、そういった整備でも大きな費用をかけております。市民会館におきましては、今年度その特定天井の工事を実施しておりますが、市民会館のほうは、29年度を含めると7億余の費用をかけております。文化会館につきましても2億円を超えるお金で、合わせますと9億5,000万円というような多額な改修費用等をかけながら現在運営しております。

13ページですが、利用者数を見ますと、市民会館の平成22年度は大規模改修がありました。それによりまして使えなかった期間がありますので、大きく落ち込んでおりますが、今、合併以降、全体的には下がってきている傾向となっております。稼働率は、こちらには書いてありませんが、平成28年度の稼働率ですが、市民会館につきましては67%、文化会館につきましては83%ということで、これは館が使えるものに対して、実際に使用した日数のパーセントになっています。それと、文化会館が83%ということですが、こちらは先ほど申しました研修室、そういった利用が特にあるものですから、稼働率が上がっております。この2つの施設ですが、今後両館を同じようにしていくのか、当然市民会館につきましては、大規模改修を行って7億余のお金をかけておりますので、残していくという形で考えるのが担当課としては思っておりますが、こちらの文化会館、こちらにつきまして、現在の機能を同じように維持したまま今後も継続していくのか。また、ある程度、現在財政課とかいろいろ話の中では、ある程度ホールの機能を抑えて、落として、例えば池新田や佐倉公民館が持っているホールのように、市民が気軽に利用できるようなホールの形にして、一番お金がかかっているのが音響施設、照明施設、そういったものに改修費用がかかります。そこら辺をもう少し落として、現在ファームリングというところが指定管理の中で入っておりますが、そういった方がいなくても使えるようなホールにしていくとか、また電源の事業でつくられておりますので、なかなか難しいのですが、ホールの用途変更をして別のものにして、研修施設とか、社会教育で考えるなら資料館的なものにした複合施設、そういったものに変えていったほうがいいのか。そういった点を担当課としてはいろいろ考えているわけなのですが、もし今後市としてどういった方向がいいのではないかとというご意見があれば伺いたいなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

以上です。

○司会 ただいま社会教育課から公民館のあり方、それから文化施設について説明をさせていただきました。

公民館のあり方につきましては、副市長さんをリーダーとしまして、あすですけれども、関係部長さんに集まっておいて、もう一度スタートさせていただくというふうに考えておりますので、本日はこういった状況のみの報告とさせていただいたらと思っております。

また、文化施設についてですけれども、先ほど今ありました照明ですとか音響施設、この辺も大分両館とも傷んでおりまして、今見込みですと両館とも億を超えます。

○社会教育課長（鈴木弘康） そうでした。1億円以上の改修費用が今後にもかかってくる。

○司会 見込まれています。ですから、先ほど言いました、そういったフルの施設ではなくて、少し照明もある程度電気がつけばいいのではないかと、そういう利用方法を検討する中でスタートするのか、本当にフルの音響施設が必要なのか。また、電源の施設ということもありますけれども、市としては1つあればいいのだとか、そういった方向を考えていく必要があるのではないかとということで、

本日の提案となっております。もしご意見をいただけたら。

紅林委員さん、特に使っていただいているので、使う側としてのご意見がもし伺えましたら。

○教育委員（紅林幸枝） 厳しいことを言っていますが、済みません、市民会館のほうも文化会館のほうも年に何回かの少年少女合唱団のほうで使わせていただいているので、状況はよく私わかっていきます。市民会館が何年か前に大規模改修をしたときに、反響板をつけていただくことをお願いしてやっていただいて、本当にないときよりは全然よくなったので、助かっています。ですが、私たち正直、市民会館以外のホールで演奏することもあるのです。例えば、牧之原市のい〜らとか、大東町のシオーネとか、ほかいろんなところなのですけれども、それでもやっぱりホールの持っている音響自体、良くないというか。例えば、合唱なんかだと、ピアノ位置、子供たちの立つ位置が、ほんの5センチ10センチ違うだけでホールに響いてくる音というのが全然違ってくるのです。それをやっぱり探るのにすごく大変なのです。やっぱり本当に音楽を知っている人が、例えば市民会館に来て演奏しようかという、なかなかそういう意味では大変な部分がやっぱりあるのです。例えば、今後稼働率を上げていく、このホールをそのままの状態で維持をしながら稼働率をやっぱり上げていかなければ、ホールとしてやっぱりやっていけません。ただの箱物になってしまいますよね、置いておくだけでは。改修だけ進んでしまってお金だけかかってしまって、でもそこにやっぱり稼働率を上げていくことでその部分のお金の回収ができれば何とか維持はできていけるということを考えていくのであれば、もう一回その市民会館の、今後改修をしていって稼働率を見込めるのか、そのあたりも考えていかないといけないのかな。

文化会館に関しては、反響板がないです。あそこで音楽そのものをやろうとすると、キャパも少ないので、逆にそれを生かすのであれば、例えばあそのホールをもうちょっとキャパを少なくして、もうちょっと音響を良くして。例えば、私自宅でピアノを教えているのですけれども、なかなか発表会をやるのに、ここではやらないのです。ほかのホールに行ってしまうのです。ピアノの発表会という音響が大事になってしまうので、ほかのホールに逃げてしまうのです。だから、そういうものが地元の人たち、御前崎の人、牧之原の人たちの例えば音楽を本当にやっている人たちが使えるようなホール、もう少しキャパを少なくして、音響をもうちょっとよくして、鍵盤をよくしてももらってとか、いろいろ考えたらあれなのですけれども、そうすると稼働率がもうちょっと上がってくるのではないかな。ただ改修をするだけではお金がかかるばかりで、その先の稼働率を上げていくことを考えると、ただ箱物を置いておくだけでいいになってしまう。だから、改修をした後にどうしていったらいいか、どういう人たちを見込んで改修をするのか、そこを考えていかないと、例えば文化会館のほうをキャパを少なくして、本当にこじんまりとしてできているものなので、こっちはもうその上で残しておくのなら、キャパを大きいまま、何か稼働率を上げていくようなことを考えていかないと、箱物だけ残っていつてしまって、ただ古くなっていくから改修だけして。周りに新しいホールがいっぱいできているので、本当に厳しいこと言うようだけれども、本当に音楽やる人たちは、ではほかのホール行こうというふうに、どうしてもになってしまうので。

○司会 下村委員さん、何か。

○教育委員（下村 勝） 私も今の紅林さんのお話にちょっと共感するところがあって、私の妻がピアノの発表会とかよくやっていて、最初御前崎の市民文化会館を利用しようかという話が出たのですけれども、まず値段が高いのです。掛川は美感ホールというところがあって、そこをよく使うのですけれども、そこは値段が安いのです、利用料が。多分ハードルが何段階かあるのですけれども、この市民会館のほうでしっかりした音響の中で1つあれば、少し値段が高くてでもやりたいという人が出てくる。でも、敷居を下げて、本当に簡素なところでもいいから、そういうところでやりたいという人もいるはずだと思うのです。なので、使い方をできるだけ上下に分けて、金額を分散していただいたほうがいろんな利用の仕方があるのかなという、同じお金をかけるのだったら、完全に方法を分けるというほうが自分としてはいいのではないかなというふうに思いました。

○教育委員（紅林幸枝） シオーネさんは、それこそフルコンのピアノが2台あるのです。ヤマハさ

んとカワイのピアノが2台入っていて、美感ホールのほうは、ヤマハの掛川工場、ヤマハに掛川工場があるので、そこからすごくいいピアノが入っていて、ピアノの発表会となるとピアノを弾くので、いいピアノで子供たちは弾かせたいな、子供たちはいいホールの中でやらせたい、子供たちもそこで弾きたいという気持ちはあります。

○教育部長（伊村 衛） 利用者の立場というか目線でご発言をいただいて、本当に今2館あるのですけれども、当然合併前の各町に1つずつあったということで、すぐにはできないと思いますけれども、例えばもっと機能の高いものを1つとして造っていくのか、あるいはこのまま2つ存続をしていくのかという、そういう大きな、検討をする必要がまた今後出てくるだろうというふうに考えています。当面は、本当に音響ですとか照明にも憶というような金額が今予想されているものですから、そこについては、またもう少しご相談をさせていただきたいなと思っております。

○総務部長（増田正行） 済みません、1点、水を差すような話で、今伊村部長がおっしゃいましたように、今、市のほうでは公共施設マネジメントというものを進めています。約160の施設を所有しています。これは、合併当時のものをそのまま引き継いでいるものですから、ただこれと同じ状態でメンテナンスをしていったときに、40年間で約780億円くらいかかります。年間で18億円。当然今利用者も減っている、人口も今後減っていきます。それだけのものを今後、市の財政として維持できるかというと、これはもう扶助費がどんどん、どんどん伸びていって、そういった維持管理費もふえてくるとなるとなかなかできませんので、今言われたように、長期的な目で見たときに、本当にその人口が減って利用者が減っていったときに、中途半端な施設を2つ持っているほうがいいのか、ではもう1つグレードを上げて1つにして、1つはもうやめるよというようなことを今後いろんな施設でもやっていかなければいけないようなことも発生すると思います。

先ほどの学校の話も、長寿命化という観点で話をしたものですから、計画法という話だったのですが、本当は裏には将来的には学区の編成であったりとか統廃合であったりとか、小中一貫であったりとか、そういったものがある程度見えていけば、では浜岡東小学校がもう四十何年経っています。それはではどうしますか。でもそれが見えていないとずっと同じように改修、改修と続けていくような話になるものですから、ぜひ今後のこういった会議の中では、将来をではどうしていくのだという話も踏まえた上で、こういった各論の議論をしていければなというふうには思います。

○教育委員（紅林幸枝） ごめんなさい、私もそれをさっき学校施設の長寿命化の話のときに、学校だけではなくてほかの社会施設、例えば公民館なんかも古くなっていきます。公民館が古くなったときに、では公民館また建てて、では学校も建ててというよりは、長い目で見たときに、例えば学校の中だったら学区を再編するとか、新しく学校を建て直すといったときに、公民館もこれから公民館と防災と分かれるのだったらコミュニティーセンターという形で、例えば学校の中にそれを入れてしまおうとか、何かそういう形で考えていけば、その施設を幾つも造るよりは良いです。

○総務部長（増田正行） そのとおりなのです。そういう複合化もですが、やっぱり最終形がある程度どういうふうにしていくのだというものがやっぱり見えてこない、そういういろんな案が組み合わせられないものですから、ぜひそういう議論をもう少し、では20年後とかそういったものを見据えた中でこういう議論を、今の議論を利用していければなというふうに思っています。

以上です。済みません。

○教育長職務執行者（吉村 勝） 総務課長、何か。

○総務課長（鈴木雅美） 確かに文化施設というのかな、それは利用者数、こういう数字を出していただいたのですが、社会教育課長が言われたように、ホールを2つ、規模は少し違いますけれども、そういうことであれば利用者数なんかも文化会館が会議室あります、研修室あります。市民会館は、舞台ホールを使うロビーとホワイエも増えて、その辺の利用者数かなと思うので、その辺の分析は、研修センタープラス市民会館のホールといったようなことで、ホールなんかも音楽のイベントであるとか舞台芸術であるとか、いろんな使途があると思うので、その辺をどこに特化していくのかというのは、非常に難しいとは思いますが、あと市民の皆さん方の知名度というところを年頭に置いて考

えていって、2つの施設が大と中といいますか、そういったところが必要かどうか、では代わりにどこかの、ではまだないような施設なのか、あるいは御前崎公民館が今あそこでは津波の危険性があるからというような話もあるし、では文化会館、あそこにあっていいのかなというような、具体的なゴールをしっかり示してあげて、施設をどこへ持ってくるかみたいなことを考えていくのがいいのかなというふうに思います。160の公共施設ですか、あるということで総務部長からのお話がありましたけれども、やはりこれをずっと維持していくというのは、非常に体力が要ることで、2つあるものは1つにして、2つ潰して1つ建てるというようなことでやっていかないと、なかなか財布ももっていかないのかなというふうに思いますので、そういうことを長期的な視野を持って考えていく必要があるというふうに思います。

以上です。

○司会 ありがとうございます。

本日は3点ご協議をいただきました。いずれも答えが出るというようなものではございませんけれども、きっかけとして今後も検討をお願いできたらと思っております。

副市長さん、最後何か。

○副市長（鴨川 朗） 施設の関係につきましては、長期的に考えていかないとだめだと思います。直接の問題ではなくて、やっぱりさっき総務部長言った考えと全く同じです。長期的にどうしていくかということを、小中学校もそうですけれども、文化施設についても、そういうような先を見据えた方向性を出していただきたいなというふうに思っています。

もう一つ、済みません、一番初めの不登校の、紅林委員さんがおっしゃったように、自分の身近にもやっぱりママ友ということをしごく聞きまして、そこを抜けてしまうと子供がいじめられるかもしれないというふうにお母さんが思っているらしいです。だから、そこにいとその仲間の子供さんたちも仲間にいる、そんなふうにいるお母さん方がいるなというのを非常に危機感を持ちますけれども、子供さんは子供さんで、紅林委員さんが言ったように、そんな保護者と先生、生徒の信頼関係であるとか親と子供とのコミュニケーションであるとか、そういったものが今非常に希薄化しているなという危機感を持っておりますので、ぜひその辺を改善できればなというふうに思いました。済みません、両方触れましたけれども、そんな感想を持ちました。

○司会 ありがとうございます。

そのほかよろしいでしょうか。

4 閉 会

○司会 それでは、本日は第1回目の総合教育会議ということでご協議をいただき、まことにありがとうございました。予定をした時刻となりますので、終了させていただきたいと思います。

最後に挨拶を交わしたいと思います。

（起 立）

○司会 どうもありがとうございました。

（相互に礼）